記　録

稲賀敬二名誉教授　聞取記録

日　時　平成一二（二〇〇〇）年一〇月二四日　一四時～
場　所　広島大学事務局東千田分室
聞き手　広島大学五十年史編集室員　小宮山道夫・菅真城

本文中の〈〉内の記述は編集室によるもの

広島大学への赴任

［小宮山］一応話題の中心は基本計画委員会〈広島大学統合移転・改革に関する基本計画委員会〉になるとは思うんですが、先生の広島大学でのご経歴全体についても是非お伺いしたいので、着任当時からのお話していただければと思います。まず、広島大学に来られた経緯というものを教えていただきたいと思います。

［稲賀］そこからですか（笑）。経緯はちょっと変な経緯でございまして、こちらの大学、文学部の講座に欠員が出たからなんですけれど、ちょうどその時に、私、立教で非常勤から専任になったばっかりの時で、そこへこっちからの割愛が舞い込んだもんですから、こちらの発令が〈昭和三一年〉一〇月一日になってますでしょ。向こうが四月一日で専任になってたんですね（笑）。困っちゃいましてね。向こうはあの、一般教養の方の担当でしたから、向こうを集中講義にするわけにいかないんですね。だもんだから、わがままを言ってこっちの方を集中講義にしてあと半年間は立教の方に在任してたんです。非常勤のままでですね。こっちの教授会の方では、「専任で来てるやつが集中講義をやって、向こうで毎週授業をやるとは何事だ」なんて言うんで、ごたごたあったような話を聞きましたけれども。

ま、そういうことであの、こちらへ赴任しました当時というのは、なにしろ私まだ三〇前でしたから、文学部の先生方ってのはみんな、助手の人を含めてみんな私より年上の人ばっかりなんですね。そういうところへよそ者の若造が来たからなんとなく非常にいろいろ気を使いましたのと、それからちょうど私が来た時は森戸学長の時代ですけども、あの当時はまだ新制大学ができたばっかりですから、高等師範担当教員と文理大担当教員との間で、やはりまあ多少ぎくしゃくがあるんですね。学部長は高等師範から合併された岡本学部長〈岡本明〉がやってらっしゃいました。それから、文理大生え抜きの方は土井忠生さんがいらっしゃる。私は一応土井さんが教室主任で声をかけてこっちへ来たわけなんですが、来る早々から「いったいあいつはどっちの派に属するか」なんて見られるもんですから、これ非常にややこしかったんですけども。まあ、私の元々の性格が人と喧嘩したり張り合ったりするのは嫌いですから、両方から可愛がられたような気がしますね。ただその時期、ちょうど森戸さん〈森戸辰男、初代広島大学

長（昭和二五年四月二九日～三八年三月三一日）がそろそろ任期満了で次の学長選挙が行われるというのがちょうどその時期でして、そのあたりは何か怪文書がいろいろ飛び交いまして、下馬評によると誰々が有力候補で、誰々がダークホースであるとかなんとかその辺に名前あがっている人が作った文書であろうというようなことがもっぱら噂になってましたけどねえ。

まあ、それにしても来たばっかりのときは非常に私、気楽に過ごさしていただきましたし、それからまだ若かったから三〇年安保の頃、ちょうどその前後の頃、三四年くらいでしたか、森戸さんが世界中回った時に話しつけてきて、ミシガン大学に一年間行ってこいと言われまして、旅費の方はフルブライトからもらって、のこのこ一年間広島を留守にしたりしておりましたから。まあ、三〇歳、三〇代のところは非常に気楽な生活しましてですね、委員会のメンバーにも何にもならずに済みましたし、ちょうどあの、社会党の浅沼さんが刺されて殺されるあの事件なんかの時にミシガン大学のアナーバーにいまして、テレビであれを見てぎょっとしたりしたぐらいで、世の中の風当たりからは割に保護された格好で、おまけに私の講座〈古代中世国文学講座〉の教授の金子金治郎先生というかたが非常に学問熱心な人だったもんですから、三〇代のところはよく研究・教育に専念できました。そっから後が大変でした（笑）。そっから後がおたくの方の第二項目の「広大紛争の経験」というやつに入るるわけですね。

［小宮山］ 多少時間を戻すんですが、東京におられた時に広島大学について抱いていた印象がございましたら教えてください。

［稲賀］ それはですね。広島大学について抱いていたというより、私の父親っていうのが高等師範の卒業生だったわけです。ですから、広島の高等学校受けたのも父親の知り合いの方が文理大の助教授をやっていらした西川平吉さんという方ですけども、ま、そういうつながりもあって広島へ来たということもあって、広島大学については随分前から関心は深かったです。ええ。

いやまあ、考えてみるとあの時も変なもんで、もうひとつ私が東京であの、私の恩師は池田亀鑑博士なわけですが、あの方のところへ二つ話が舞い込んでて、もうひとつ岡山大学の話と両方、こう重なりましてね、ごたごたごたごたして。今になって考えてみると、岡山行かずに広島へ来て金子さんの下で仕事させてもらったんで、私には非常にプラスになったんだろうという気がしますけれども。

［小宮山］ 広島に実際に来られですね、学生の雰囲気ですとか教職員の雰囲気ですとか、特に東京の大学とこの点が違うなというようなことはありましたか。

［稲賀］ なにしろそれまであの、学生としてしか過ごしていませんから、今度は来て、私が教える立場に変わりますから、立場が変わると全体の雰囲気を比べてみるっていう具合にはならないわけなんですね。立教にいる時というのはあんまり事務の方との対応なんていうの

はほとんどありませんでしたから、とにかく大学院、あの大学卒業する自分の経験と、それから初めて私立の大学に勤めるようになった経験と、それから国立の大学へ赴任してきた時の経験と、とにかく自分の目の前のことが中心でして、他と比較するというような視野はその当時持ち合わせていませんでした。ただ、それだけに何も知らなかったんで、いったい文学部で教えてると、教育学部の高等教員養成課程の方がたくさん聴きに来てらっしゃる。どちらも教職免状を出せるのになんでこの二つあって、授業の体制はこういう二つで一緒になってるんだろうかと、その辺の組み立ての理解すらはじめはよく分からないような格好でしたからね。まだ何にも知らずに来たということなんでしょうね、その頃は。

大学運営とのかかわり

[小宮山] それではいよいよ紛争のあたりのお話しを伺いたいんですが、例えば昭和三三年一〇月下旬の反対運動の問題ですとか、三五年五月の六〇年安保闘争ですとか、具体的な学生たちによる行動について当時どういうふうにお考えになっていましたか。

[稲賀] ですから三〇年代のところは、私はもうほとんど学生運動というものはいろいろ問題があって教授会でもいろいろ議論されるものだなという、その時は多くの先生方もそうだったんじゃないかなと思いますが、ああいう問題が議論されているけれども、あれに対応するのは学部長であり教室主任であり、それから学生委員会の委員や学生部が対応するものであって、一般の教員はそれを眺めていればいいんだというような先生方が文学部には多ございましたし、私なんかまして駆け出しですから、そういうのを見習っていればいいというので、まあ外は多少風があっても、私は無風地帯の中でなりゆきを第三者みたいなつもりで眺めていたというのが本当ですね。

ですから、大学の問題に本当に首つっこむようになったのは、紛争の始まる紛争前夜だということなんです。まあその紛争前夜からあと在任中の、ここにまとめてあるやつをもう少し区切って申し上げますと、だいたい四つくらいの時期になりまして、一つは、学生に対応する問題がひとにぎりの委員だけの対応ではもう対処しきれないということで、学生委員会を改組・増強して、学生委員会・教務委員会・厚生委員会、この三つに分かれまして、その中のできたばかりの厚生委員会というやつに所属したという、これが大学問題と正式に顔つき合わせた最初なんですね。

厚生委員会という名前はいいですけれども、一皮むけば学生問題で一番問題の焦点の一つは学生寮の問題がありますから、その寮問題の、福利厚生施設ですからね、寮問題に対応するというのが厚生委員会の主な立場。それから、それに併せて学生からの要求の中には当時から生活協同組合を設立しろという要望がありましたんで、厚生委員会では生協なるものの性格はどういうものであるのかというような、このあたりでチレイブ〈聞取不能〉とかどうとか何てぇのを初めて覚えて、へえそういうものかと知った次第なんですが。

ですから厚生委員会ができたのが確か昭和四三年の六月くらいですが、そこからが始まりで、その厚生委員会をやっているあたりで紛争がどんどんどんどん、こうエスカレートしていきまして、そのエスカレートした学生運動に対応するために、学生の方はどんどんガリ版のビラを配布しますわね。大学の方は、何か学生に周知させようと思うと勝手に文書出すわけにいかないんで、学部から評議会、評議会からみんな集まって議論して、それから学生に伝える告示みたいなものをまとめる間、随分時間がかかって対応できないんですね。それで、そのところで大学側の意向をはっきり知らせるための広報委員会的な組織をつくらなくちゃいけないと。あれも一番最初は飯島さん〈飯島宗一、第四代広島大学長（昭和四四年五月七日～五二年五月六日）〉の発想だったと思いますね。

その覆面、まだメンバーもはっきり公表されない広報委員を五人くらいで組織しまして、一番最初は何だったかなあ、『学内速報』〈『公報委員会速報』〉だったかな、『学内速報』という半紙版みたいなやつを事件があるたびごとに、少なくとも週に一遍、多いときは毎日みたいに出しましたが。これでどんどん配布したりするようになって、で、それから正式に認められた広報委員会がスタートして、だいたいこの広報委員会が昭和四四年の六月ぐらいからですから、ちょうど私が厚生委員をやっている時期の途中から広報委員を兼ねるという格好で、これが一つの時期なんですね。で、広報委員会は紛争が一応沈静化した後、全学部から委員を出す形に改組されました。私は広報委員を四四年から四六年の三月までやったと思います。で、ここのところで私一応、紛争の始まりから封鎖解除、そして授業再開、そして授業を定着させる、そこまでが私の一区切りだったわけなんですね。

これが済んだから、まあこれで今度は少し勉強に専念しましょうと思って、何にも役員やらずにやっておりましたら、ちょうど今度は教職員組合の書記長という仕事が回ってきまして〈昭和四七年度〉、この教職員組合の書記長という時期がちょうどこっちに出てきます移転問題、キャンパス問題・移転問題がこう出てきた時期になるんですね。で、組合の方も当然キャンパス移転の、統合移転の問題っていうのに取り組む格好になる。で、教職員組合の新聞なんかに教職員の移転についてのアンケートをとりましたり、その結果の分析をやったり、挙げ句の果ては、大学では問題にしていない「移転三候補地の他に広域市内分散型による統合などというのはいかがであろうか」なんていうのをアンケートの項目に入れたら、これは随分支持者が多かったですね。移転の嫌いな学部、移転しなくちゃいけない学部で移転の嫌いな先生方はみんなそれに賛成という具合になりました(笑)。まあこれで、ですから四七年ぐらいがその組合の書記長時代ですね。で、そんな変なことをちゃかちゃかやってたもんだから、「あれ泳がしとくとろくでもないことを言う。これはいけない」っていうんで、今度は大学の方へ組み込まれちゃって、それが基本計画委員会へ入ってきたそもそもの始まりぐらいになるんでしょう。ですからそれ以前にやっていた『仮設0』なんかをまとめていらしたあの時期の問題っていうのは、うすうすと広報委員として耳にしたりはしていましたけれども、直接それにはタッチしていなかったです。封鎖解除前後の八項目要求に対

してどう答えるかというような、非公式小委員会作ったりした時にはメンバーになりましたけれども、正式にタッチしてなくて。ですから基本計画委員会に入ったのも、それより一月くらい前に既に発足していて、追加で私、入ったような気がします。何か確か夜、飯島さんから電話がきて「基本計画委員会に入ってくれ」とおっしゃるから、「いやそりゃ入るったって、あの全学的立場から考えなくちゃいけない。私自身はやはり文学部の一員なんで、なかなか文学部の意見と違うようなことを取り組むのは荷が重いんですが」といったら、「いやいやそういうので構わんから入れ」と言われて、「はい」という返事をしたわけですがね。ですから、厚生委員・広報委員時代と何もしなかった組合の書記長時代とそれから三番目が基本計画委員会時代に入ると。

で、基本計画委員会に入りまして、この分でいうと四九年に、四九年じゃないや。基本構想ですから四八年ですね。あれまとめる頃というのが一生懸命、授業が済んだらすっとんでって朝から晩まで委員会で缶詰になって、ペーパーを作る。なにしろこれがないと文部省との交渉ができない格好でしたから。で、その時に各部局や各委員会からいろいろな案が出てきてたんですけど、それ取りまとめるだけだと基本構想の骨組みがどうもはっきり見えないもんですから、あのペーパーの一番最初のところへ総論みたいなものを綱目的に整理したらこれ割に委員の皆さんから好評でございまして、だもんだから「文章作るのはお前が一番ちょうどいい」てんで、全体の文章の調整やら何やらその辺でやり、そのために今度は委員会の中の幹事会というやつに引っ張り出され、そのうちに段々格があがって副委員長だ、周りを眺めたら大抵委員長ってのは学部長になっちゃうんですね。学部長になると委員会の委員長辞めますから。どんどんどんどん上の方の人みんな辞めちゃって、気がついたら私しか残ってないんで委員長に祭り上げられちゃった、というこれが基本計画委員会の時の輪郭でございます。

で、その基本計画委員会の最後の頃になりますと、もう統合移転は決まっているし、それから移転年次についての素案も出てくるし、それから移転する部局の新キャンパスにおける配置計画みたいなものもほぼ固まってきた。こうなったらもうこれは基本計画の時代じゃないから、次は実施計画の時代である。実施のためには部局の主体性を考えなくちゃいけないし、部局の主体性となれば学部長のリーダーシップを大いに発揮していただく方がいいから、基本計画委員会を廃止して実施計画委員会に致しましょうというんで、基本計画委員会の幕引きをやって、これでやれやれ元へ戻れると思ったら、今度は竹山さん〈竹山晴夫、第五代広島大学長（昭和五二年五月七日～五六年五月六日）〉から「やっぱり基本計画委員会時代の作業との継続の問題があるから、お前実施計画委員会にも入れ」ってんで、もうこっちへすぐ移っちゃいまして、これがまた学部長ばっかり委員になってる中へ何もやってない私がちょこんと入るって変なもんでございましたがねぇ。あの結局、実施計画委員会が五四年ぐらいに始まって、結局広大辞めるまで実施計画委員は続けたと。

その途中のところで、大学教育研究センターの運営委員をやっていたんですよ。えっと、二代目のセンター長だった……ちょっと名前が出てきませんが、工学部長だったあの方〈丸山益輝、第三代センター

長（昭和五四年七月一日～一二月一九日）が、中国行ってた時に急死なすったもんですから、ピンチヒッターみたいに、ちょうど国際会議が目の前に来てたもんですから、大教センターのセンター長を決めなくちゃいけないと。まあ、基本計画委員会時代からいろいろ全学のことよく知ってるからちょうどよかろうってんで大教センター長を兼ねる。これピンチヒッターのつもり、ワンポイントリリーフのつもりで引き受けたんですが、なんだか最後になったら喜多村さん（喜多村和之・当時大学教育研究センター教授）なんかから「いや、これは任期二年になってるけど、任期裏表やるのがルールである」とかなんとか言われて（笑）、四年間掛け持ちしましたけど。

で、それが終わった頃かなあ、終わった頃に今度は生協の方から「生協の理事やってくれ」ってのが来まして、常務理事もやったんだったけなぁ。常務理事をしばらくやったんですね。生協の方は、基本計画委員会の時代からまあ生協育成ということを考えてましたから、忙しくて嫌だというわけにいかないんで、これもこなしておりまして。生協もちょっとぎくしゃくしていた時代がありましたから。生協の側としては、今度移転を控えて向こうに行く時の体制その他ということ考えてましたから。

それやってるうちに今度は学部長に選挙されたもんだから、これは兼務できませんので生協の方は辞めた。というようなのが、ですから厚生委員・広報委員時代とそれから一年か二年くらいの短い期間でしたけれども教職員組合の書記長時代と、それから次が基本計画委員会時代、そして次が実施計画委員会時代で、これは何やら大教センターやら生協やら学部長やらというようなのと兼務しながらやっていたら、広島大学へ来てから三〇数年の間の二〇年ばかりがあっというまに過ぎちゃった、ということになっちゃったわけですね（笑）。

ついでにその後もちょっとこれは余談ですけれども、後でふれることになると思いますが、学部長やってた時のいろんな問題をちょっと背負い込み過ぎちゃってもう体が持たないと思って、学部長再選された任期の途中でしかも定年前だったんですけれども、だいたい定年前で学部長の任期途中で辞めた変な男ってぇのは私ひとりなんでしょうけれども。わがまま言って辞表出しまして、「倒れてあの世へ行くのはこれは身から出た錆だからしょうがないけれども、倒れると周りの人に迷惑かけるからわがままを通してくれ」ってなこと言って辞めまして、辞めてこれで家で猫の頭でも撫でていようと思ったら、放送大学の広島ビデオ学習センターがスタートするんで、お前新しい変わったことをやるのは慣れてるからちょうどいいなんて（笑）。何のことはない、体が悪いから広大定年前に辞めました。辞めた明くる日からまたあの跡地へ通う格好になりましてね。ちょっと格好悪かったんですけれども、格好悪いなんてこと言っちゃいられませんから、まあそこで初めて今度は生涯学習のお勉強をやりました。今度はほんとに最後にしようと思ってたら、今度は安田女子大学が大学院つくるから手伝ってくれって言われて、それでまたあっちに行きました。大学院がドクターができたからもう今度はほんとに大丈夫と思ったら、新しい学科つくるからこれもやれっていうし。学科つくったからもういいかと思ったら、いやいや今度は臨時増募の定員利用して学部つくるから

これもやれって言われて、とうとう未だに足が抜けないというのがその歩みでございます。

まあ、そういう大きな枠組みの中で後の各論でございますがね。厚生委員会時代のことっていうのは何か細かくお話ししておく方がいいですか。

厚生委員会・広報委員会での活動

[小宮山]そうですね。先生がこのことには特に気を使ったですとか、こういう仕事をしたというようなことがありましたら、お教えいただきたいのですが……。

[稲賀]まあ、厚生委員会の時代というのはまだ私駆け出しでしたから、生まれて初めて寮問題と取り組んで、その頃の寮の問題っていうのは、まかないをやってくださる方、炊婦ですね。炊婦の公務員化という要求が出てまして、これ紛争の時の要求項目の一つになってたものですが、それとの対応で寮も二種類あって、こちらの青雲寮とそれから昔の広島高等学校の時の寮の流れをくむ薫風寮と、まあ両方とも派閥が違うんですね。両方とも食事が旨くないだとか何だとか言うもんだから、厚生委員長と二人で寮生の食事を食いに行って懇談をやったり、懇談がいつの間にか団交に化けたり、いろいろございましたけれども、まあそういうようなことを厚生委員会ではやっておりました。

それから広報委員会を兼ねてからは、最初に広報委員会の『学内速報』〈『広報委員会速報』〉、そいつを今度は『学内通信』にして、だから広報委員会になってから最初の仕事っていうのは、これは飯島先生からもお話しがあると思いますけど、紛争の記録ってやつは恐らく門田先生〈門田博知、元工学部教授〉、飯島先生、細かいことはおっしゃらないと思うんですね。一番きちんとまとめてありますのは、『学内通信』の途中から「広島大学紛争記録その1」という四四年一月からのがありまして、これもう資料でお持ち。

あそこでずうっと項目をたどっていっていただきますと、学内通信が始まる時期まで到達します。それから後のは学内通信の第一号からの日録のところをたどっていくと、細かい事件がずっと出ている。で、だいたい紛争が沈静化した最後の時期っていうのは、何かこの中に新入生に宛てるための磯貝広報委員長〈磯貝英夫、当時文学部助教授〉が紛争から現在までのまとめを書いていらっしゃる文章がありまして、それが一番紛争の間の流れを大掴みに掴んでいくのには便利がいい文章だったと思います。とにかくこの一回目の分でどっかの節目のところに磯貝さんが書いていらっしゃる。あれは非常に要領よく流れを掴んであったわけで、私も大分記憶が薄れちゃってるもんですから、この前引っ張り出して読んで、「うんうん、これはよくまとまってんな」と。学生を受け入れるための、学生配布用に作った磯貝さんの文章だったと思います。

まあ、細かい流れはそうなりますけれども、この分をやった一番最初の大きい問題っていうのは、封鎖している学生に対して飯島さんが登場なすって、まず学長団交をなすったんですね〈昭和四四年五月

一二・一五日〉。大学会館使いまして、そこへみんな入れないからっていうんでテレビまで据えて、恐らくああいうテレビまで動員しての学長団交というのは初めてだったと思いますが、東京大学でも何項目要求だかがたくさん出てああいう団交やりましたが、飯島さんは非常にてきぱきと中核の学生とのやりとりをやってったもんですから、途中で学生側からも拍手が出たり、向こうの方が絶句しちゃったりですね、非常に迫力がある学長団交だったことを私も今覚えております。

結局、そういう団交をやり、そして最後は封鎖解除に踏み切らなくちゃいけない。大管法〈大学の運営に関する臨時措置法〉なんかが施行されて、それに対する意見も学内でいろいろ割れてましたから、その時期というのがちょうど大管法の発効直前にやったもんだから、あの頃の新聞では「東の東大、西の広大」というので有名になっちゃいまして。で、あのときの論理というのは、あれもこれに載ってますけど、要するに、中核派がもし当初掲げていたように大学改革を目指すものであれば、封鎖を解除して一緒に改革をやろうではないか、しかしながらもし中核が帝国主義大学の解体及び革命路線をとるのであれば、国立大学としては君たちと一緒に同居するわけにいかないから、これは改革の場を確保するために封鎖を解除しますぞと。いずれにしても、中核が自主解除するかこっちが解除するか、どっちかしか道はないんだと。それに対して中核派のリーダーよ答えろ、という公開質問状を出して。で、その時の伊与田委員長もちゃんと解答をこっちへ出してますけれども、そのやりとりをやり、それは表、公式のあれですね。飯島さん自身も向こうのリーダーと私的に会ったりして話を交わしたりして、できるだけ自主的に封鎖解除させようとしたんですが、結局まあ向こうは乗ってこなくて、封鎖解除に踏み切ったということで。

封鎖解除〈昭和四四年八月一七・一八日〉の当時というのは大分前から計画は立てておりまして、前の日っていうのは、もう今なくなりましたが、学校の周りのあたりにある旅館に封鎖解除要員みんな泊まり込みになりまして、朝何時だったかなぁ、私は北門の責任者だったんです。北門は守りがもう、守ってもしょうがないと思ってたんだか、あまり防御はきちんとなってませんでした。ただやっぱり行くとき、何がおこるか分かんないと。で、私も昔のやくざの討ち入りみたいに晒しを腹に巻いてなんてな格好をやりましたよね。やっぱり正門が一番バリケードの向こうとしてはシンボル的存在でしたから、正門の解除に向かった磯貝広報委員長は一番抵抗を大いに受けた格好になったはずです。まあ、そのあたりまでが封鎖解除でございますね。封鎖解除の当日っていうのは、ちょうどこのあたり、あの大学会館を本部にして、前の日から向こうはあそこのメタセコイアなんかをみんな根こそぎ切っちゃって、倒してバリケードにしたり屋上から火焔瓶投げたり。で、午後になってから、飯島さん教育学部の建物からマイクで、「まあ君たちが最後まで頑張るのはよく分かるから、もうこれくらいで一つ手打ち式やろうじゃないか」という呼びかけをなすったりですね、それから職員の方は本部の建物の後ろに食堂なんかのガスボンベがあって、それに火炎瓶で火がつくと危ないもんですから、浅川学生部長なんかが職員の方に指示していろんなものを搬出したり、まあいろいろありました。

あと、それが終わってからの広報委員会の任務というものは、最初はしばらくの間は入構制限をして機動隊に常駐してもらったわけですね。で、機動隊常駐で夕方になりますと「もう定刻になりましたから、教職員の方はキャンパス内から退去してください」というアナウンスを、本部の学長室の隣にマイクを置いてて構内に放送するんですね。それも広報委員の仕事になってまして、大抵私と今中さん〈今中比呂志、当時教養部助教授〉がやったかな。磯貝さんと三人でよく「退去してください」という放送をやってますと、段々声の調子で誰がしゃべってるか分かってくるんですね。学生のビラの中に「広大の三大悪人」っていうんで、飯島さんが名前出ると、これはまあ当然として、磯貝さんも広報委員長だからこれも当然。三番目になんで俺の名前が出るのかと思って首をひねった。「三大悪人」のひとりに数えられるや、これは名誉だと思いましたが（笑）。やはりでもいつ不測の事態が来るかなあという気持ちもなくはなかったですね。

で、それで授業再開になったんですけども、これはだから、これの紛争の記録なんかの正式記録にはのっかってないのを二つ三つエピソード的に申しますと、授業再開しますと中核派、文学部は文共闘といったんですが、その連中が授業に出席して来て、私のところにも来るんですね。で、途中からヤジを飛ばし出す。私もしょうがないから「俺は授業をやりに来たんであって、ヤジを飛ばすようなやつとは話し合わん」と。あのヤジといっても、「紛争中にやったお前のこれこれを自己批判しろ」式の発言ですから、「お前たちがそういうことを言ったって、ヤジを飛ばすような格好の話し合いには応じない」ってんで、部屋出て行こうとすると、向こうは出て行かせまいとするんですけども、それを突き破って廊下に行ってから廊下で長々と延々と議論したりですね。

一番おもしろかったのは、おもしろいと言っては語弊がありますが、向こうは紛争中からよくあの「密室の中で教授会や評議会やってけしからん」ってやつが要求なんですね。で、「公開教授会をやれ」っていうような要求を出したりして、授業再開後も、なぜこういう具合になったか文学部の教官の個人個人の意見を聴き、自己批判を求めるっていうんで、教授会やってる最中に大挙して押し寄せて来て、みんな缶詰になっちゃった。一人一人にみんなマイク突きつけて所感を述べさせる。私の順番が来て、マイク持って来たけども「わしはマイクはいらん」って。マイク持ってるとあと面倒くさいですから。「マイクいらん」って断って、「お前さんたち、教官へ自己批判なんて言うけれど、お前さんたちも封鎖やってる間に随分悪いことやった。」封鎖中に教官室にある個人の本なんかを随分持ち出して売却したり、というようなことが多発してたんですね。ですから「お前さんたちが封鎖中にやった悪いことを自己批判したら俺も話しに乗ってやるけれども、一方的にこっちの自己批判ばっかり求めるようなやつとは話し合わん」って言って。それで部屋出ようと思ったら、これまた腕掴まれたりして出すまいとするやつと相撲取って、ちゃんと勝って脱出できたんですから（笑）、あの頃は体力あったんですねえ。今だったら逆にひっくり返されることになるでしょう。

ま、そういう授業再開とそれを定着させるための役割を『学内通信』

というのは相当果たしただろうと思います。その頃私も文学部の警備委員ていうのをやらされていて、あそこちょっとはずれにあったもんですから、文学部の看板がよく盗難に遭うんですね。で、一遍くらい犯人捕まえてやろうと、学生係長〈文学部厚生補導係長・山本賢治のことか〉と一晩玄関のすぐ横の部屋へ泊まって、窓からすぐ飛び出せるように一晩寝ずの番やったんですが、とうとうその晩は現れなかった（笑）。そんなことがありました。

ま、そういうやつからさっき申しました教職員組合。これがね、私が教職員組合の書記長時代に作ったやつです。これみんな私の写したものです。写真にみんな「未来へ好奇の眼を輝かすものたち」これ移転賛成案。「どこまでも歩み続ける者」、「足を止めてチギシュンジュンする者」こっちは改革推進派、こっちの方は文学部みたいに保守派（笑）、というやつをやったりしました〈以上、『広島大学教職組』第九〇号の表紙を飾った子猫の写真の説明〉。挙げ句の果ては、「移転した先は荒野であった！だが鳴きながら帰っても家はない」、「冒険は危険な遊び。だが、つい手を出したくなる」、「犬猿ナラヌ、犬猫ノ仲デモ、敵味方ノ対立意識ヲ放棄スルコトガアル」とか、まあなんとかかんとかこんなことを書きまして、この写真評判がよくてですね原版ネガを貸してくれっていう希望がたくさん来ましたけれども。おもしろいでしょ（笑）。ま、そういうようなところで、ここはアンケートの分なんですけど、そのアンケートの中で「広域市内分散型による完全統合案」なんていうのを書いて、おちょっかいを出したりしていたと。

で、この時期にちょうどこちらでいいますと、キャンパス委員会の方で候補地が段々絞り込まれて、東広島と可部の奥の方〈可部町山田〉と今の石内〈五日市町石内〉のところと、あの三つくらいに絞られてきたもんですから、私もあの組合の書記次長や委員長なんかと四人くらいで三候補地を眺めに行きまして、当局側の印象とは別の三候補地の印象記みたいなものを書いたりしておりました〈『広島大学教職組』第八九号、一九七二年〉。まあなんだかかんだか、組合も結構忙しかったですね。

それから基本計画委員会の方に入って、ここからは割におたくの方に資料がある格好になりますでしょうか。ですからここに入ってからは私があまり雑多な分かり切ったことを申し上げるより、おたくの方でこの辺の関係はどうなのかというようなことがございましたら、私の記憶にある範囲で申し上げるという具合に致しましょう。

大学改革・統合移転に対する認識

［小宮山］ 多分その当時から一〇年くらいたった頃に『学内通信』の中で先生が振り返って文を書かれたと思うんですが、その中で「大学改革委員会が出された文章等には多分学内で一番目を通してる読者ではなかろうか」というように書かれていたんですが、当時大学改革委員会の動向についてはどのようにお考えだったのでしょうか。

［稲賀］ えー、改革委員会が出したペーパー、正式な文書に目を配り始めたのは伊藤さん〈伊藤虎丸、当時教養部助教授〉なんかが主になっ

て書いていらした『仮設０』なんかの分。それから各種専門委員会ができてからの……、あれは改革委員会以後になりますね。あの時期のいろいろな文書については、部局で検討する材料になるんですけれども、あんまりよく読んでそれを理解しようというような雰囲気はなかったんですが、私はなんとなく、えーその辺が一番私の立場の困ったやつで、まあこんなこと言っちゃいけないんですが、文学部っていうのは一番移転も嫌いだし改革も嫌いだったんですね。えー、ところが私の立場としちゃー、基本計画委員会で活動している限り全学の動向に沿うたことをやらなくちゃいけない。それ持って帰れば当然学部ではみんなが「あんな馬鹿なことをなんで考えるんじゃ」と言われる。それから今度は基本計画委員会で各部局の案、せめて文学部でもこの程度はのんでくれるだろうなぁと思って請け負って持って帰ると、「そんなのはまかりならん」てこっちで言いますでしょ。ですから、見通しの甘さで学部帰ってやっぱりだめでしたって基本計画委員会帰ると、ま、本部の立場としては、いわば「安請け合いした戦犯者」なんですね。今度はこっちの案を学部にのませようと持ってきますと、「俺たちの嫌いなことなんで持って帰ってきやがる」っていう、反逆者兼……何ですかな、もうとにかく非常にやりにくいのを続けておりました。ま、それだけに両方の言い分をよく理解していないと、両方、学部と全学との調整がつかないだろうということがありましたんで、さっきおっしゃったように出てきたペーパーについてはできるだけきめ細かく読むというような姿勢で取り組んでたわけです。

［小宮山］ 先生個人としましては、最終的には移転という結論になっているわけなんですが、移転を含めた改革については、個人的にはどういうスタンスをとられたのでしょうか。

［稲賀］ あのー私自身はですね、本質的には非常に保守的な体質を持ってるんで、自分の机の上に置いてある鉛筆一本縦のものを横にするのも嫌なんですが、ただ目の前のことを嫌だ嫌だと思っていて、最後になってどうしても嫌なんだけれどもこうせざるを得ないというところへ追い込まれるのは一層気分的に嫌だろう。だから、先見の明があるなんてことは言いませんけれども、当然流れからいったらこうなるであろう。その時に慌てないように十全の体制をつくっておかなくちゃいけない、というのが基本にありましてね。それでやってるうちに、いつの間にか進歩派の方に近い色で見られるようになっちゃったと。未だにだから本質的には保守派です。ですから、あんまりドラスティックな改革というようなやつは私の頭からは普通出てこないんで、極端な反対意見と推進意見のどこの辺をとったら、皆さんが「まあこの辺ならついていこうか」というふうに納得してくださるかという、その妥協点を見つけるというのが私の役割であろうと思って。今、安田〈安田女子大学〉で学部をつくったりする案作りもだいたいそういうような格好なんですけれどもね。

［小宮山］ では移転やむなしというふうに思われるようになったのは、もう基本計画委員会に……。

【稲賀】あれは、私は初めから飯島さんのご意見には非常に共鳴してましたんで。飯島さんが紛争を解決する時の公約の一つとして、大学は改革しなくちゃいけないんだと、これが一つある。改革をするためには、東千田の現地で改革するのか、それとも新しいキャンパスでやるのか。東千田でやろうと思うと、高層化していくしか諸々の部局の要求を入れることはできない。しかし、ここで高層化しても周りの住民との間のトラブルや地層の問題があってこれはできない。いうことになれば、改革を実現する場所というのは移転せざるを得ないだろう。これは私も割り切ってました。ですから、学部長になった頃の文学部の方を説得するときの論理、これまた論理になってないんですけれどもね、「皆さんが移転にあんまり乗り気じゃないことはよく分かります。しかしながら、今ここのところで広島大学が新キャンパスに移転すると東広島市の周辺はまだ土地が安い。これから広島大学に赴任していらっしゃる方は、キャンパスの近くに自分の永住の宅地を購入することがまだできる。その時に後からいらした構成員はどう言って皆さんに感謝するか。『先輩たちはよくぞ新キャンパスに移転を決めてくれた。あれのおかげで我々は住宅を建てる土地を手に入れることができた。』だいたい人間なんてのは、一生涯の間に人から感謝されるチャンスなんてのは滅多にないんだから、まあ皆さん嫌だろうけれども、移転賛成にしましょうや」なんてなことばっかりしゃべっておりました。どこまでが本当のことか分からないから、聞いてる人の方は半分エヘラエヘラと聞いている以外にないんじゃない。「移転賛成に引っ張り込むための話か」（笑）おかしな論理ばっかりやりましたねえ。

話飛んじゃって学部長時代の話になりますけど、学部長のときに一つ問題だった……、ああ学部長になる前から問題だったですね。新キャンパスの図書館の問題がありまして、で、図書館はみんな賛成するんですが、図書館に資料の集中管理をやりたいという提案が図書館の委員会の方からありました。そうすると文学部の先生方みんな嫌うんですね。今までみんな教官室と研究室で資料をみんな抱え込んで、手元にないと勉強できないみたいなことを。で、おまけに本のラベル、各学科がみんな自分に便利のいい図書番号を付けている。これもまたNDCに統一するってやつ。これまた先生方みんな反対するし、特に助手会の人も反対する。で、その時の話で何でしたかねえ、「図書館に集中管理する、手元から本が無くなっちゃう、みんなそれに反対してらっしゃるけど、だいたい文学部っていうのは移転すると基準面積が少ないから建物自身は縮小される可能性があるんで、今みたいに自分の部屋に書棚を天井まで積み上げて資料持っていくのはほとんど不可能である。とすれば、図書館へ持っていく方がずっと便利であって、だいたい図書館まで遠いという感覚でお考えになるからいけない。図書館を我が文学部の植民地であるというふうに思えばよろしい」って言ったら、隣に座ってた進歩派の先生が「植民地とはなんであるか。聞き捨てならん。訂正しろ。」っておっしゃるから（笑）、「はっ、植民地は訂正致します。大東亜共栄圏を使います」というような……（笑）。何か私がしゃべってるとみんなそういう具合になりましてね、紛争中の中核との、文共闘との団交やってても、大抵の先生は何かぎくしゃくなるんですが、私がしゃべっているときはなんとなく向こうもあま

り追求してこないんですな。半分くらい笑い話に近くなったりして。まあ、あのあたりで変な話術を身につけちゃったと、自分で自信を持ってますけど（笑）。どうも話を途中であれしちゃいまして……。

基本計画委員会委員に就任

［小宮山］ ちょうど先ほどもふれられましたが、基本計画委員会の委員に就任される際に飯島学長から話があったということでしたが、正式発足の前に臨時の基本計画委員会がありましたよね。その当時にもう正式に委員に……。

［稲賀］ いえ、発足して後で追加があったと思います。一月ぐらいしてからでしょう。この表でいけば四八年の一月にスタートしていまして、私が正規に入ったのは五月のところにあがってますね。

［小宮山］ 五月の時点までは全く関係のない話だというふうに思ってらしたんですか。

［稲賀］ ええ、そういうことなんです。その四八年の三月くらいまではまだ組合の書記長をやってた頃じゃないですかねえ。ええそうです。組合の書記長の任期が終わるのが、三月か四月、四月に総代会をやって終わるんですがね、それが終わったところでこっちに組み入れられたということで。あの時が、あーこういうメンバーでしたねえ〈基本計画委員会委員名簿を眺めて〉。

［菅］ 先生の他にも飯島先生から直接そういった形で委員を頼まれることはあったんでしょうか。

［稲賀］ 私、それは存じません。よそがどうなってるのか知らないんですが。学部によっては学部長に依頼されたりしたケースがあるんじゃないでしょうか。

［小宮山］ ちなみに飯島先生は指名する理由については、どのような理由をあげられましたか。

［稲賀］ 何にもおっしゃらなくって、とにかく基本計画委員会発足既にしているんだが、それに協力してくれないかと。まあ広報委員会時代から割に皆さんにお目にかかる機会は多かったですから、そういうことでまあ、「あれなら作文係くらいにはちょうどいいだろう」というふうにお考えになったんじゃないでしょうか。

［小宮山］ 当初から起草というような役割を与えられて……。

［稲賀］ いやそうこうことはございません。あの時にはだいたい各部局からひとりは委員が出ていること、それからいろんな領域の方を集めるという二つの線がありましたから。文章を書く、やってるうちに

「あいつにたのみゃあ、なんとか徹夜して書いてきてくれる」というふうに皆さん思いこんじゃったもんですから、作文屋になっちゃいました。

まあですから、四八年の六月二二日にある『統合移転と改革についての基本構想』、あれたしかあの辺でまとめてしまわないと、概算要求の文部省との関係っていうのがうまくいかないんで、それこそ不眠不休で「鼻血が出てもいいからやれ」っていう。飯島さんときどき「鼻血が出てもいいぐらいに頑張ってやってくれ」ってよくおっしゃいましたねえ。誰も鼻血は出さなかったようですけれども（笑）。

[小宮山] 基本計画委員会が発足してしばらくしてですが、広報委員会の座談会の企画がありまして、「基本計画委員会に望む」というのが題目で『学内通信』〈八九号、昭和四八年〉に掲載されています。その中で基本計画委員会の設置過程あるいは概算要求等を例にして、部局の教授会や教官会に諮らずに評議会決定のみで様々なことを決定していくという、そういう形態に疑問が提示されています。この問題は大学自治の関係に深く根ざした発言と思われるんですが、このような改革期以前にはあり得なかった大学の意志決定過程というものについては、先生はどのようにお考えでしたか。

[稲賀] 緊急事態なんだからしょうがないんだというふうに割り切ってました。あの座談会に限らず、すべて大学が公的に出した文書その他については、必ず批判意見はいくらでも出てくる。それを最後までまとめてから正式決定という具合にしてると今もよく社会から批判されます。大学っていうのは議論ばっかりしていてちっとも結論が出ない。結論を出してもちっとも実行しないってやつになっちゃいますから。この時期っていうのはチャンスを逃してしまったら、もう二度とそのチャンスは巡ってこないんだというふうに割り切ってましたんで、広大にいる間は、もう私はそれで通すしかないと思ってました。

基本計画委員会の組織

[小宮山] それと一つお伺いしたいのはですね、幹事会というのが組織されるんですが、大学に残っています公的記録としては昭和四八年の八月二七日から五一年の三月一一日までという期間で一応幹事会の簿冊が残されているんですが、議事録が残されているのは四八年の一〇月八日以降でして、それより前ですとかそれ以降に幹事会を開いたとかっていうようなことはありましたでしょうか。

[稲賀] 私が加入した頃から幹事会というのをやり始めたんじゃないかと思います。さっき申しましたように、この基本構想をまとめるためには、ほんとに授業のない時間は一日中でも委員会やってないと間に合わないんですね。で、フルメンバーで委員会開くっていうのが相当難しいし、それでやってると授業の方に差し支えのある方が、それから特に水畜産の委員の方なんか遠くからいらっしゃらなくちゃいけない。そういうこともあって、幹事会というものを組織してそこへ一

応全権を委任していただくと。ただ、正式に外へ出すもの、ペーパーについては幹事会で原案を作って、全体の会議にかけて了承をとるというシステムがその辺で定着しまして、で、概算要求がだいたい形がついたあたりでその緊急幹事会方式を一般的なものに変えていったんだと思います。同時にそうせざるを得なくなったのは、基本計画委員会の下に専門委員会がたくさんございますから、その専門委員会と基本計画委員会とを結ぶルート、専門委員長を基本計画委員会に入れていると、どの専門委員長を幹事会に入れるかという人選のややこしさというのがかえって煩わしくなる。で、それよりはもう頻繁にでもいいから専門委員長と基本計画委員会とは話し合いのパイプは持っていくという形に徐々に変質していったんじゃなかったかなあと思います。まあ細かくは私も覚えていません。

[小宮山] 五一年でもう幹事会を止めてしまったといいますか、解散、解散なのかどうかも記録からはよく分からないのですが……。

[稲賀] 幹事会自身が正式なものじゃございませんから。まあ正式じゃないものは緊急事態が終わった今のところは止めてもいいんじゃなかろうか、五一年というと私が副委員長になった頃ですか。だいたいすべてが正常に動き出したからということがあったんだと思います。

[小宮山] これは暫定的なものであったという……。

[稲賀] ええ。で、特にこの五一年時期になりますと、このあたりからキャンパス問題、実際の統合移転の移転年次の問題や、それから新キャンパスにおける学部の配置問題、これが問題になるのと、今度は大学院問題の五領域の関係のやつが出てくる。みんな各学部の利害と非常につながってきますので、幹事会でとやかく決めたりしたものはとてもじゃないけど学部の方ではのんでもらいにくかろうという読みがあったような気がします。

[小宮山] あと恐らく幹事会の前身になると思うんですが、小委員会というのが四八年にできますね。

[稲賀] ええ、恐らくそれだと思いますね。私が基本計画委員会に入ったときには既に幹事会自身が動いていたと思いますから。はい。

[小宮山] 正式発足以降はもう小委員会は幹事会という形で統一されたということなんでしょうか……。

[稲賀] 内部的な言い方だったろうと思います。規程化はされていなかったと思います。

[小宮山] 四九年あたりからいろいろワーキンググループを作ろうというような話が出まして……。

[稲賀] ええ、あのう、ワーキンググループというのもこれは規程化しないで柔軟に問題に対応できるようにというので生まれた組織ですね。ですから専門委員会にすると規程化しなきゃいけない。規程化するためにはひと月以上かかっちゃいますが、ワーキンググループというのは部局長連絡会議か何かで「これについてのワーキンググループを作ることになりました。ついてはこれに参加するメンバーを学部長の責任で推薦してください」という格好でぱっと集めて、仕事が済んだらぱっと退いていただけると。だいたい委員ということに任命されると辞令もらっちゃうと忙しくてたまんないってんで、みんなこの辺から逃げ腰になっちゃうんですね。ワーキンググループだと「この作業が済んだらもう無罪放免ですよ」と言えば、みんな「じゃあまあしばらくの間汗かくか」っていうんでやって下さる格好なんですね。

[小宮山] 専門委員会に設けられました小委員会というのは、これは専門委員会のワーキンググループみたいなもの……。

[稲賀] はい、みたいなものです。あの、専門委員会っていうのは、ほとんど正式なメンバーが部局代表になってますから、これを全部集めるっていうのはまた開催の日程の調整とか、とにかく専門委員会がやまほどあると掛け持ちの委員がたくさんいるんですね、それもあるもんですから実務をやるためには、専門委員会の中でまた実務担当者のグループを作るということで機能化していたんです。

[小宮山] 特に先生は言語系専門委員会に、専門委員会を組織する前から世話役という立場におられるんですが、これはどういった経緯だったんでしょうか。

[稲賀] あのーこれは、時期的にいってあれ総合科学部が出来あがるちょっと前くらいでございますでしょう。じゃないですかねえ。恐らくあのー、教養部を総合科学部にしていく上で、いろいろな領域の先生方の所属を眺めるっていうと、どうも外国語関係の先生の数は非常に多いと。これを全部部局の中へ含み込むというのは大変であるし、それから当時の一つの文部省なんかの考えとして外国語センターというものを、言語センター、外国語センターというようなものを一つのたまり場にするという考え方がありまして、その束ね役になったんですけれども、総合科学部の外国語系の先生方に話に行きますと、一方の方に総合科学部という部局化の案が進んでいると、先生方はみんな教養部の時には自分の直属の学生がいないんですね。ところが総合科学部になると直接教える学生が出てくる。自分たちは自分のほんとに教える学生を抱えてやりたい。センターへ行って、今まで通り自分の抱える学生のいないようなセンター行きなんかはまっぴら御免でございます、という意見が非常に強かったんですね。ただ、だから今にして考えると、あの当時に言語センターみたいなものを作っておけば、今の世の中には非常に役に立ってたと思うんですが、当時はみんな乗りませんでした。

当時はみんな乗らなくて、後で振り返ればみんな今の世の中先取り

してやっときゃよかったと思うのがわんさとあるんですけれども、当時は反対でございましたね。五領域の問題だってそうかもしれません。それから、文学部が今大学院化するんで大講座に変えてますけど、私一番最初の頃から文学部の改革案の基本としては大講座化を出してたんですね。学部の大講座化もそれから五領域の大学院ってやつも、どれも当時の人たちはみんな反対して乗りませんでした。そんなわけの分かんないもののむんかと。だいたい意識としては、旧帝大でやってらっしゃるのと同じ形を狙うっていうのが、皆さん意識の中にありますから、どっかがやるとそのまねはすぐするんです。独自の格好というのはなかなか乗らない。それでまあ、どれもみんな形を変えちゃったんですが、中には最近になって結局最後の到達点はそれになったというのが多いわけですね。

[小宮山] 当初からその言語センターと呼ばれるようなものには、もう意欲的にこれは是非つくるべきだという形で取り組まれたんでしょうか。

[稲賀] 私は言語センター、ちょっとよく分からないところもありましたが、まあ取りまとめ責任ということで教養部の先生方とは数遍よく話し合いましたけど、どうしても話はすれ違いで成案を得るという見通しはあの当時なかったように覚えてます。

[小宮山] それがあの答申の少なさといいますか、言語系専門委員会としてのまとまった報告書みたいなものは、他の専門委員会に比べますと……。

[稲賀] ええ。統一見解を出せるまで煮詰まらなかったということでしょう。専門委員会の答申を出すためには、やはり全員一致にならないと困るわけで、そこまで行かなかった記憶があります。

大学改革案の起草

[小宮山] それでは研究教育体制専門委員会の方にちょっと話を移させていただきたいと思いますが、「研究教育体制の基本構想」は四八年の三月に出された第一次試案、第一次試案と呼ばれるものですね。このなかの「当面の方策」という項目の中では「学問分野の研究体制を一定水準以上にするには、各部局が原則としてドクターコースまでの大学院を持つことが望ましい」という表現だったんですが、これが四八年の第二次案以降、「ドクターコースを有する部局においては専門分野研究体制の拡充整備を図るとともに、これを欠く部局においてはドクターコースの設置が不可欠の条件である」というふうに変化しています。このドクターコース設置を不可欠とする立場というのは、この後に出されます「広島大学統合移転と改革についての基本構想」四八年六月のもの、あるいは「研究院の基本構想」などでも提唱されているのですが、例えば夢物語とも指摘されることもあった大学改革委員会の中間報告に比べて大学院の改革方針というのは現実的な路線

をとったと思われるんですが、この変化の原因とそれについて考えられることがありましたら、お聞かせいただきたいんですが……。

[稲賀] あのあたりは私もいろんな問題が前後しちゃってはっきりしないんですねえ。とにかく初めから各部局あるいは先生方の意識の中には自分たちの学部も大学院が欲しい、ドクターが欲しいという、これは根強く初めからあったんですねえ。基本構想をまとめる前に各部局から将来構想を出していただいて、飯島さんヒアリングをなさった。その時にもみんな大学院構想と、こういうセンターが欲しいというセンター構想とこれがもう目白押しのように出てきておりました。ですから、その全学の意向というもの、飯島さんは一番最初に「皆さんが欲しいと思うものがあったら、文部省と掛け合ってみる。獲得してくるから何でも出せ」、まあ、それから後で「お前さんの出してるこの分はあんまり根拠がない」っていうんで、段々整理したわけですけれども。ですから、研究教育の一番基本になる大学院の問題っていうのは、「持たないところに持たせる」ってそれだけ書きますと、持ってる方が反発するんですね。持ってる方はどういう論理かっていうと、「あんな今まで大学院のない学部ってのは、力がないし伝統がないから大学院がないのである。今頃そんなことをいうのは寝言か」っていうんで、「それより基礎がしっかりしている我々のところをもっと拡充すべきである」っていう、利権尊重案ですね。こっちのほうは、「いや、持ってるところは別として、持ってない方を育成すべきである」、この両者が対立してますから、さっきの文章にあるように、「持ってるところは一層充実させ、持っていないところはこれをつくる」という基本で、全学を平等なところまであげていくというのが最初のスタートラインでございますね。それでやってるうちに、文部省の方としては旧帝大と同じような形での大学院研究科というのはまねしたってそう簡単にはできませんよ、というやつが出てきて、そこでいろいろな工夫が凝らされる格好になってきた。その工夫の最終地点が五領域というやつになるわけですね。

[小宮山] 五領域の構想図といいますのが、四九年の五月に幹事会で稲賀先生の稲賀案と鳴海案〈鳴海元、当時理学部教授〉との二つの案が出されているように見受けられるのですが……。

[稲賀] そうでしたっけねえ。えへへへへ。

[小宮山] これが稲賀先生の案なんですが……。

[稲賀] 未だに残ってるもんなんですねえ。

[小宮山] で、こちらが鳴海先生の案なんです。幹事会の記録なんかを見ますと二案ありますが、基本的には同じものですから、鳴海先生から稲賀先生に文章化するように、みたいなことを指示されたのかと……。

[稲賀] ええ、何かそういうことになったようです。

[小宮山] この図の原案といいますか、元のアイデアというものはどのあたりから来たんでしょうか。

[稲賀] これは、評議会報告に恐らくのっかてると思いますが、飯島先生が文部省とか、あるいは井内さん〈井内慶次郎〉や木田さん〈木田宏〉なんかといろいろ話をしてらっしゃるうちに、従来型の大学院とも違うし、それから筑波型のものとも違うそういう格好で五領域というやつを考える。で、五領域という名前をはっきりしてるのは、鳴海さんのやつの方が「五領域」とはっきり。こっちの方は、四領域あってさらにそれを包み込むもの、何かその辺ちょっとごまかしもあるんですけども。特に一つだけ出したんじゃ格好がつきにくいんで、こういうのを書いたような気が致しますね。確かあの時「研究院」っていう言葉自体も文部省の規程集か何かどっかにちらっと出ていたんで、それを利用した記憶があります。今も残っているかどうか……、廃止しない限りはどっかに残ってるんじゃないかと思いますが。ただ、普通の教育六法なんかにはもう出てこないようですね。

[菅] 今は九大が研究院って使っています。

[稲賀] あーそうそう。出てきましたね。

いやー、たくさんこういうのを書きましたねえ。

[小宮山] それでこのお渡しした資料ですが、これですがねえ、一応公的資料に残っています稲賀先生のメモ類ですね。それを一覧にしたのがこの表なんですが（笑）、確認しただけで、まあ文学部を除くと四四件メモが見つかりまして、基本的には研究教育関係の原案が多いんですが、これ以降ほとんど印象としては稲賀先生の論調通りに委員会が進んでいく印象があるんですが（笑）。

[稲賀] 委員会は進んでいったんですけれども、なかなか全体が動かなかったという時期でございますね。

[小宮山] 先生がそうやって積極的に原案を作成されるというのは、そういう役目があった、あるいは……。

[稲賀] 役目があったというよりもですね、一番極端な言い方しますと、基本計画委員会があるためには何か問題を提起しなくちゃいけない。何にもなしに集まっていただくわけにはいかない。まあ今の問題はちょうど今大学院問題であるとすれば、これを材料にして皆さんのたたき台をまず作りましょう。だから、私の時代の委員長というのは議論のためのたたき台みたいなものをせっせと書いていたということでありまして、他には飯島さんが文部省とお話しになってこの線でどうであろうかという、そこんところを地ならしするための作業もあるし、それからこれはまあ日の目は見ないんだけれども、つなぎのたたき台としてこういうのを皆さんに考えてもらいましょうかなあと思っ

て書いたのもあります。で、それまとめて飯島先生のとこ持ってくと、飯島先生が正式な機関には諮らずに「この前文部省行った時に、ちょっと課長のところへこういうことも検討しているぞとあのペーパー渡しておいたよ」と。ですから、正式にこれが決まったという格好じゃなくて、「広島大学ではこうしたことも検討しております」と、もっとはっきり言えば、「検討していて正式に決まったら正式にお願いにあがります。決して休眠状態でいるわけじゃないんだ」、という眠っていないことのアリバイを作るために私やってたという……（笑）。

［小宮山］そういう意味で他の委員の方というのは、こういった原案を作成したりすることは……。

［稲賀］あの私が委員長になった頃には、もう他の先生方お忙しいですからあまりペーパーを書いていただくということはしませんでした。なるべく私がやれることは私でやってしまおうというふうに考えておりました。この癖はもう文学部にいたときも同じで、文学部の先生方っていうのは、基準面積が小さくなると木造校舎分だけ小さくなる小さくなる、小さくなるって恐怖症に陥ってましたから、私設計図なんか書くのできないんですけども、基準面積通りに計算するとこれだけになる、これを四階建てにするか三階建てにするかでエレベーターがあったりなかったりするわけですが、「四階建てにした場合には廊下の幅がこれだけになって、部屋の個人研究室がこのくらいになって、というような図を何枚も書きましてですね、「これくらいあったらなんとか今の研究体制維持できるでしょう」というような説得工作をするためにそういうペーパーを何遍も書きました。だからほんとにあの時期というのは、自分の勉強何にもしないでこんなのばっかりやってましたねえ。

大学院五領域構想の作成

［小宮山］ちなみにこの五領域構想の図がですねえ、四九年の九月に『学内通信』（一一四号）を通じて公表されるわけなんですが、現在私どもが文章の内容を読んだり、図を見たりしても少し分かりづらいところがありまして。例えば矢印の太さですとか、あるいは計算センターがどういう位置に位置付いているのかですとか、黒丸、白丸が恐らく既存か新設かの違いなのかもしれないんですが、ちょっとそのあたり説明していただければと思うんですが……。

［稲賀］えー、計算センターは将来を見通すと全学の要になるからこれは大事なんであります、というのはありましたねえ。体育科系というのは川村さん〈川村毅、当時総合科学部教授、統合移転・改革に関する基本計画委員会体育系専門委員会委員長〉が非常に強く主張していらしたやつで、それを位置づけるためにこの教育系と医学系、川村さんのお考えが健康医学みたいなものを加味した体育という考え方でしたから、それで鹿屋体育大学に川村さんいらしたんですよね。だからその辺のことが一つあったんです。恐らく基本的には飯島先生から

のサゼッションもあってこの二つをこのあたりに位置づけた記憶があります。あまり細かいことはいわずに、なにしろこちらの方にはこのグループを代表して声大きくしてものおっしゃる方があんまりまだいらっしゃらない時期ですから、こちらの方はそれ相応に声が大きかったから（笑）。で、こちらの方のはもうみんなどれも当初からの念願事項ですから、これは大きく取り上げておかなくちゃあ治まらない、というだけのことだったと思います。これもとにかく、文部省との話を詰めるために一応部局の討議も経たという格好で、これで文部省と交渉しますよという了解をとるまで相当急いでやった記憶がありますね。まあ、それであの五領域の大学院ってやつが、以後原田学長の最初の頃までまだ生きてて、どっかの段階で「前のやつには捉われない」っていう決断をなすったように覚えてますが……。

［小宮山］ この五領域構想ですとか研究院構想ですが、これを実現する上で一番問題となったのは既存のドクターコースとの関係をどうするかということで、そこで出てきたのが領域内研究教育体制協議会連絡会ですとかそういったものだと思うんですが、これを実現する上でもっとも大きな障害となったものというのは何に当たるんでしょうか。

［稲賀］ 私はあの当時まだ大学院の組織自身に手を加えると全体の見直しにつながる、ということを皆さんが非常に気になすっていらした。見直しっていうのをもっと端的に言いますと、教員の担当資格審査をもう一遍経なくちゃいけなくなるであろう。その時に落ちたりしたら大変だというようなことは、潜在的に皆さんが持っていらしたと思いますねえ。で、しかもこういうふうに、飯島先生は四つないし五つの系に既存の研究科をグルーピングするだけなんだと、それから学部の方の組織はそのままに温存するんだという基本でおっしゃるんだけれども、受け取る構成員の方は「いやいやこれは何か背後に変な落とし穴があるに違いない」と、皆さんもう疑い深くなっちゃってんですね（笑）。まあそういうことがあってなかなか前へ進まなかったということです。

だから、総合科学部が認可された時っていうのは、このあたりと総合科学部ができた時が一緒くらいになりますでしょう。じゃなかったかなあ。四九年ですか。あっ、そうか。だから総合科学部が一応形がついた。しかも総合科学部が通った時はですね、事務局の方もびっくり仰天したんです。あの当時まだ、学部設置が認可されてそれが完成年度を迎えた時に、初めて今度は大学院組織っていうのを申請する。これが普通だったんですが、総合科学部の方は設置ＯＫが出た時に初めから〇〈博士講座〉が付いちゃって大学院まで含み、あれ何か間違えて〇が付いたんだっていう説があったんで……。で、総合科学部の問題がこれで一応形がついたから、全学の大学院の分に手をつけましょう。ただし、当時の文部省としては、教育系という方はまだ教科教育関係のものも含む大学院、ドクターコースというのはどこにも認めていない時期だったんで、これはやはりちょっと別枠にし、しかも実務的にいえば医学部と同じようにお医者さんの分も養成課程、教員

の方も養成課程という実社会とつながりがあるからというようなんでこういう絵を描いたということですね。

[小宮山] 領域内の体制連絡会は、稲賀先生の発案っていうふうになるんでしょうか。

[稲賀] 恐らく発案の方は私になると思いますが、まずそういうのはとてもできっこないと思いながら……（笑）。部局間の協力体制を組まなくちゃあ困りますっていうのは、もう当初から繰り返し私言ってたわけなんですが、その都度実はなかなかあがりませんでした。やはり学部の壁は厚かったし、どこの学部もやっぱり学部の利益を守りたいという気持ちは強いんですね。

[小宮山] こちらは昭和五〇年の幹事会で、研究体制連絡会を最終的に報告しろという段階になった時の資料なんですが、稲賀先生のメモとですねえあと田村先生〈田村泰夫、当時政経学部教授〉からですねえ、同じ内容なのかどうか分かりませんが、次の回で田村先生が報告されてるんですよね。これは稲賀先生のメモをまとめるようにされたのか、それとも対抗案というものだったのか……。

[稲賀] いえ、私のはあくまでこういうものを作ったらどうでしょうかという提案を致しまして、田村さんは非常に積極的に協力していただいてたんで、それをやるためにはこういうふうに考えた方がいいんじゃなかろうかというご意見をまとめて幹事会の方に出してくだすったという種類のものだったと思います。ですからこれは正式に学内の機関へ持っていくんじゃなくて、「こういうことが必要だというふうに基本計画委員会でも言っているのでよろしく」というようなことを学部長か何かが一言おっしゃる程度で幕引きになったような記憶がありますね。

いやー、私の汚い字のやつでたくさん残ってるんですねえ（笑）。

[小宮山] また話が飛びますけれども、これが四九年の幹事会での配付の資料なんですが、大学院の組織に関する……。

[稲賀] 五領域のやつですね。

[小宮山] そうです。それと公式記録には残されてないんですが、小尾先生〈小尾郊一、元文学部教授、統合移転・改革に関する基本計画委員会委員長（昭和四八年一〇月一九日～）〉からたくさん資料を頂きまして、その中に同じ日付同じ内容なんですけどすこし詳しい資料と二種類あるんですが……。

[稲賀] こっちが私が小尾委員長にお見せした時の下書きでありまして、とにかくこれは相当急いでいたんです。文部省との交渉がありまして、飯島先生と小尾さんと私と三人でとにかく皆さんにお諮りする原案みたいなもの早く作らなくちゃいけないということになって、ま

ず最初にこれを私が書いて、小尾さんと「この線でじゃあまとめていいですな」と。で、その上でそれをもっと簡略化してこういう格好で配布するというようにした記憶があります。日にちはだから提案するためのこっちは案であって、これが実際に提案した方、そしてこれを踏まえてもう少し事務的に整理したものを学長がお持ちになるか、あるいは文部省との交渉にお使いになるかしたんだと思います。はい。

[小宮山] このあたりはかなり小尾先生と稲賀先生、あるいは学長との個人的なといいますか、打ち合わせで決めていったと……。

[稲賀] だったと思います。なにしろ飯島先生と小尾先生、あれお二人とも長野県なんですね。で、小尾先生と私は厚生委員会時代からずうっと一緒だったんでございまして……（笑）。

[小宮山] そのあたりの人脈がかなり潤滑油となったという感じでしょうか……。

[稲賀] そういうこと。ことによったら、だから私を基本計画委員会に推薦なすったのは、小尾さんがおっしゃったのかもしれませんがね。

[菅] 飯島先生の方からは、委員会の方の審議でこういうことをというような注文というのはあったんですか。

[稲賀] 一番最初の基本構想なんかの時には、絶対これは必要だからこれ早くやれというのは佐久間さん〈佐久間澄、当時理学部教授、統合移転・改革に関する基本計画委員会委員長（昭和四八年一月二二日〜同年九月三〇日）〉の方へ来ましたし、概算要求がらみあるいはその根回しのためにどうしても必要なものについては、飯島先生からだいたいこういう方向で検討して資料を作ってくれっていう指示はあり、その時は大抵、できればこの時くらいまでにまとめなくてはという時間設定がございましたし、それがなくても基本計画委員会側としては幹事会にかけ、全体の会にかけ、特にそれが評議会の了承も得なくちゃいけないとすれば、部局の委員の間にも回さなくちゃいけないから、その間の日程調整からいって最初このくらいのペースでやっていかないと間に合わない、っていう計算はしばしば致しました。

まあやっぱり、中心になるのは概算要求に間に合わせるというやつですね、いつの世の中でも。

[小宮山] 先生が広報委員会をされてたからかどうか分からないんですが、PR誌ですね『東広島市へ統合移転をめざす広島大学』が出されているんですが……。

[稲賀] あれ作る時っていうのは、あれは事務の方から出たんですかね一番原案は。で、飯島先生曰く「うん、それは作るに越したことないんだが、誰が書くかということじゃ」とおっしゃって、それで結局私のところに回ってきまして。初めの原案書いた時には、私やはり地

権者の方に頭下げなくちゃいけないんだからと思って、一頁に必ず一つずつくらいは「お願い致します」という末尾をつけてたら、草稿を飯島先生ざーっとご覧になって「こんなにたびたびお願いしますと書かなくてもいい」って、ぱっぱっぱっとお消しになって。ただ、相当大幅に私の文章にも手を加えてくださいました。あの飯島さん非常に文章お書きになるのも早いし、人の文章添削するのも壺を得た書き方をなさる……。あの頃から私も敬服してましたですね。まあ、なにしろアララギの歌人でございますから。

そうですねえ、あの地権者へ向けてのあの文は……、あの頃私は早かったんですなあ。一晩、二晩くらいで書き上げた覚えがありますねえ。

[小宮山] 一応、基本計画委員会についてはこちらで用意した質問内容は、何らかの形でお伺いすることができたんですが、今回質問されなかった事項でこれは重要だからという話がありましたら伺いたいのですが。

[稲賀] いえ、基本計画委員会についてはもうだいたいこのまとめていらっしゃる分や資料がきちんと残っているようですから、私から記憶の曖昧なことをお話をするよりも残ってる基本資料の方でおまとめになる方が正確になるだろうと思います。まあ、もっとも今みたいに書き捨てのメモまで残ってますから、こりゃ大変なんですけれども。ですけど、正式なものは最後に基本計画委員会の本会議にかかってますから、それ以外のものはすべて幹事会止まり、あるいは幹事会に出す前に私が事務の方と、企画調査課の方でこれ出そうか出すまいかといった結果、じゃやめとこうというふうにしたもの、非公式なものだというふうにお考えになって結構です。だから、基本計画委員会の本会議に出た議題とその綴りにくっついている資料が正式なもの。後は半分私的な私の戯言というふうにお考えください。

[小宮山] しかし正式なものよりも、会議の流れの中での息づかいが伝わってくるのが、稲賀先生のメモですとか、そういったものに限られてまして……。

[稲賀] やっぱり議事録の方だとちょっと細かなやりとりが分かんなくなるんですよね。

[小宮山] こういった資料ですと添削の跡があったりして（笑）、どういうふうに言葉を選んだのかとかということも分かってきますし、なかなか議事録ですと何々について誰々に委嘱したとかその程度しか……。

[稲賀] あの、議事録の方は事務の方が整理なさいますから、これはどうしても結論だけになるんですね。いや、私が持ってる基本計画委員会の資料っていうのは本会議の時のいろんな人の意見みんな赤鉛筆で書き入れているんで、小尾先生も書いてはいらっしゃるけどあんま

り細かいこと書いてらっしゃらないでしょ。私のはぎっしり書く癖がありまして、これなんか学部の教授会のやつなんですけど、こういう具合にごじゃごじゃごじゃごじゃ何でもかんでもみんな書く癖がありましてね。で、この分で全学に関係のあるやつを大教センターの先生方の会議の時にこういう話題がありますよとこれ見てしゃべってると、いつだか矢野さんが「ちょっとちょっとそれ見せてくれ」って言うから、「何です」って見せたら、「やあまた細かく書いてあるなあ」って（笑）。

大学教育研究センター長として

［小宮山］ それでは続いて大学教育研究センター長時代のことについて、多少伺えたらと思うんですが……。

［稲賀］ はい。

［小宮山］ センター長になられた経緯というのを先ほどお話しいただきましたが、基本計画委員会の関係者としてセンター長をされるに当たって、心がけていたといいますか、こういう仕事はしようというような決意めいたものは……。

［稲賀］ いや、そういうものはありませんでした。その前から大教センターの運営委員は引き受けていて、運営委員引き受けてたのは、横尾センター長時代〈横尾壮英、昭和四八年四月一日〜昭和五〇年三月三一日〉に「あんた文学部からの運営委員でちょうどいいから」というので引き受けていた。まあそれが因縁というだけで、私はそう高等教育についてあらかじめ関心が深かったという意味のものではございません。ただ、運営委員になっているからそこで発行された各種の資料その他は割に一生懸命勉強してましたし、その中身は基本計画委員会とも絡んできておりましたから。特に初期の頃の大教センターの仕事は、今は割に大教センターの仕事っていうのは専門化した、専門領域ができちゃってますから、当初の頃っていうのは横尾さんの「ヨーロッパにおける大学史」みたいにですね、何でもかんでもいろんな話題が出る時期ですし、研究会を開くときにもその当時のトピックみたいなものを取りあげて講師にしゃべっていただくというような格好でしたから、割に私もこまめによく出ていった。まあそれが裏目に出てセンター長ということになったということなんですね。ですからこれはもう、有能な方がたくさんいらっしゃいましたから、それに言われる通りに学長に「助手のポストを来年もよろしくお願い致します」という時には、運営委員会にいって「これは職を賭して是非とも来年も助手のポストを一つ全学から流用していただきたい」というようなことをべらべらしゃべって、だいたいそれが主でございましたね。だいたい私みたいに国文学の古い方をやってるなんてのは横文字なんか分かりませんから、ちょうど私の時は国際会議やったときなんですね。直前なんです。何かああいうとこ出てたって、私なんか日本語だって相手の声が小さかったりすると聞こえないくらいですから、横文字なんてのはさっぱり分からないんで。ま、これはみんな有能な方ばっか

りいらして、英語はもちろん中国語もペラペラというような方がたくさんいらしたですから。そういう方に助けられながら四年間をやったと。

あと問題とすれば大教センターの知名度があがるに従って、よそから先生方がスカウトされちゃうわけですね。そのスカウトされるときの調整とその後任の方をお願いに行くケースと、それから公募しますとたくさんの応募者がありますんで、これをどういうふうに選考するかというそのあたりが一番気が重かったです。ある時には、木田さん〈木田宏〉があそこ〈国立教育研究所〉の所長をやってらっしゃる時に、ひとり人をこちらで運営委員会で決まったのでお願いにあがったら、木田さんから、「うーん、それはいい話ではあるけれども、彼の場合は既にちょっと顔がそっちに向いていない」、何かもうひとつ別なのが決まってたんですね。それで断られて持って帰って、こういう事情でと運営委員会でしゃべったら、運営委員のある一番うるさい声の大きい人が「こういう具合の不手際をやるとはけしからん」という大音声を発するとか、これとまた仲の悪いこっちの運営委員からまた喧嘩を始めまして（笑）、この辺をどう収めるかがこちらが大変つろうございましたが。いろいろございました。

ですからこれは、大教センターの公的な記録の方におよりになる方が、私のいいかげんな話よりも、あそこの専任会議の時にどんな話題が出たかっていうのも私のメモには毎回のやつ残しておりますけど、この教授会のものみたいにですね。まあしかしこれはあんまり申し上げなくてもいいでしょう。外国人を招聘したりする時の外務省や文部省とのやりとりその他事務的な問題がいろいろございましたけれども、特に私が今ここで何か申し上げるっていうことはございません。はい。

文学部長として

［小宮山］ 続いて文学部長時代のことなんですが、文学部の移転に際しまして、まあ先ほどした質問ともつながりますが、個人としてはどのように思って、公人として、文学部長ですとか元基本計画委員長という肩書きがあった立場としては、どのように行動されたのかというところをお教え願いたいのですが……。

［稲賀］ まあだいたい歴代の学部長はみんな全学の方針にはなかなか賛成しない。文部省の方針にも賛成しない。ある学部長なんかは大学課の課長のところで、こういう小役人どもがどうとかこうとか大きな声で言ったんで、部屋中の職員がみんなびっくり仰天してそっちを眺めていたとかいうのもあったり。それから「全学の方針に反対します」と結論を取りまとめて、全員一致で反対というふうに取りまとめると、「いや私は決して賛成致しておりません。一部の反対があったことは明記しておいてください」とかいろいろ文句はつけてきておりまして。そういういわば「非国民」「反逆者」を学部長に選挙するっていう具合になってきたのは、一つにはそろそろ文学部の意見も近くなってきた、まあ移転推進は稲賀がいつも言ってたんだから、一番ややこしい

仕事だけはあいつにやらせようじゃないかというんで選挙されちゃったんだろうと思うんですけれどもね。それだけに、そうなんです、最初のご挨拶の時には、通常前の学部長が行ってきた路線を継承してというふうに言うものでありますが、私の場合はちょっと立場が違うから、「いいものはいいと継承致しますが、高等教育における諸般の情勢判断から今こういうふうに舵を取り直さなくちゃいけないと判断したら、必ずしも前例にはとらわれずにやりますので」というようなことをしゃべった記憶がございますね。

で、まあ一番の問題はその当時が今の大学院の問題と、これはだから従来からドクターを持ってる大学院の充実のためにみなさんが納得のいくような、といっても組織を変えるのは皆さん嫌いですから、新しい専攻を立て実験講座化するとかなんとかもう昔ながらのやつ、通りゃしないとは思ってましたが（笑）、これやってました。それからもうひとつは、移転が近づいているので文学部の先生方が移転の時に最後まで絶対反対というので通したりなさらないようにするために、移転してどういうメリットが出てきますかと、さっきの、後の人に感謝されるために善行を施しましょう式のやつですねえ。そういうようなことを言ったり。

それからもうひとつの問題は、移転年次というのは一遍決まったらそれで終わるってもんじゃなくて、予算がつきませんから、移転年次が毎年変わってくるんですね。で、変わっていくと、部局の間の組み合わせ方式が変わりますから、私の学部長をやってた時は、皆さんの意見が今まで犬猿の仲だった総合科学部と一緒の時に移転したいとおっしゃり始めるんですね。これはあのー、片一方が先に行っちゃうと一・二年の一般教育と専門科目の楔形のやつの関係が時間割上非常にややこしくなって、先生方の負担も増える。その一番負担の少ない格好は、総合科学部と文学部とが一緒に移転する方式であるってんで、それをおっしゃる。けれども、総合科学部の移転費用・予算はついたけど、文学部には付いてない。まあこのあたりそれじゃあ次はずれて移転するとなると、教育学部と文学部のカリキュラムの調整、それから文学部と総合科学部との間の暫定カリキュラムの調整、これをどうするかという問題が一つありました。それと、ちょうどその頃が教職免許の再課程認定の申請をしなくちゃいけない時期でしたから、この問題にかかりきっていたというような移転業がらみのやつがありましたが。

一番私弱っちゃったのが、ちょうど総合科学部長刺殺事件の刑の確定が沖原学長〈沖原豊（昭和六〇年五月二一日～平成元年五月二〇日）〉の最後の頃で確定したんですね〈平成元年五月二七日〉。で、沖原さんが「刑が確定した時には、大学としてもこういう助手問題等についてどういう立場をとるか、という大学としての助手問題の対応等についてはっきりした意見を求めなくてはいけない。あんた一つやってくれ」と言われまして、あれなんて名前だったけなあ。教室運営等検討委員会ですか。ええ。あれの作文〈『広島大学における助手の実態、問題点、対応等について――教室運営等検討委員会報告書――』〉の責任者にされまして、今考えてみるとちっとも不思議はない内容なんですが、あの当時助手の任期制なんていうのを言うと大変でございま

した。特に文学部の助手の中には、非常にいろいろ問題がありまして（笑）、もうそのあたりと延々とやりましたですね。あのー、普通の学部長ですと、助手会からこういう問題が提起されたのでというのを助教授以上の教授会で諮って対応するというのがあれなんですが、私そういうのを先生方煩わすの嫌だもんだから、助手会から出てきた、何項目くらいあったかなあ、三〇項目くらいその検討委員会の議事の進行やら内容やらについての質問事項があったやつを、「もう他の方いいです。私ひとりで行って答えます」って助手会行って一時間半ばかり、これについてはかくかくしかじかってなやつをしゃべったりしたこともありましたけれども〈平成元年の稲賀敬二氏暑中見舞いには、「一八〇頁の質問状に、一時間半かけて口答回答をやったり」とある（『稲賀敬二回想集』四九八頁）。ご子息稲賀繁美氏によると、元来の一八〇項目を切り詰めて、実質三〇項目にして交渉に臨んだのではないかと思われる。〉。ま、そのあたりでだいたいもう疲れちゃいましたね。最後には、平成二年かな、平成元年の一二月くらいに正式答申を出したんですがね、あの時にはだから助手の任期制ということについては、結局その文章は削除される格好になったと思います。

ただその前後の頃に、文学部のある教室の助手なんかが人事院の方にまで相談に行ったりした人がいて〈教室内部で助手の任期を二年とする内規文書を作成していた事件〉、人事院からの調査やらそれから新聞ジャーナリズムにも出たもんだから、新聞記者やらＮＨＫやらいろんなところから「どうなってんだ」っていう質問が来たりしまして、まあ一番あれ疲れましたねえ。それで疲れ果てちゃってるところへうちの家内が原因不明で入院したりして、こりゃもうとても身が持たんと。どっかで失敗やって責任を取るより先に、始めに責任とるラインをつくっておきましょう、というふうに考えて九月くらいに辞任したいというやつを持ち出して、計画的にずらかったというのが私の学部長経験でございます。

広島大学改革を振り返って

［小宮山］それでは在職中を振り返りまして、文学部あるいは広島大学において、私見で構いませんので、改革はなされたか否かというところをちょっと振り返っていただきたいんですが……。

［稲賀］やはり国立大学っていうところは、構成員みんなのご意見を尊重しながらやっていくというのが建前になっていますから、いくらいい案が出てきても右から左にぱっぱっと実現できるという格好のものはないんで、それなりに歴代の学長っていうのは随分苦労なすっただろうと思うんですね。まあその中で、広大の他にも二・三非常に優れた学長のいらした大学もありましたけど、広大の場合も飯島先生始めとして今の原田学長に至るまで優れた方がいらしたから、まとめるのが大変な改革案というのを時代に合う格好でモデルチェンジしながらここまで持ってきてくだすったと。ま、確かに統合移転というのも、まだかまだか、ちっとも進まんと言ってたんですけれど、とにかく曲がりなりにも全学部大過なく統合移転できたと。そういうエネルギー

を持ってる大学ですから、これからも今までの路線を継承するっていうことじゃなくって、今までもこういう問題乗り越えてきたんだという歴史を踏まえて、これからの構成員の方もいい大学をつくるために、特に独立法人化されると一層新しいのを考えなくちゃいけなくなりますから。そういう歴史を活かして頑張っていっていただきたいなという……。まあこれ以上あんまり大きなことを言う立場じゃないんで、思っております。

[小宮山] 分かりました。どうも長い時間ありがとうございました。

[稲賀] いえいえ、あんまり客観的な資料にはならないかもしれないです。

[小宮山] いえいえそんなことはないです。あのーまた……。

[稲賀] もしですね、もう少しこの点について細かい事実関係が知りたいというような点がありましたら、何月何日の基本計画委員会で出てきたこの議事について背景がどういう具合になっていたかという、具体的なそれが出てきますとメモ引っ張り出せばその前後のやつがはっきりすると思いますので、ご遠慮なく。

[小宮山] お手を患わせることになるとは思いますが、よろしくお願いします。

[稲賀] 本当は小尾さんみたいに持ってる資料みんな寄付しちゃおうかなと思ったんですが、あれを整理なさるのは大変だろうなと思って、かえってお荷物になるといけないと思ってやめました（笑）。

[小宮山] あのもし、編集室の方が大学資料室等になりましたら是非その資料を頂きたいと思います、整理致しますから……。

[稲賀] ちょうどですねえ、私生まれたのは旅順なんですけども、旅順で生まれて小学校大連で、それから鳥取県の本籍地へ父親がはやばやと引退したもんだから、未だに本籍は鳥取県でしかも古ぼけた家の所在地が境港にあるんですね。こないだの地震で大分傾きましてね、あれ死んだ親父が建てた建物だから私の代は手放しちゃいけまいと思ってたんですけども、こりゃあどうもちょうどいい機会、親父のあの世からの連絡であろうと思って、今度の休みの時に帰って全部家は解体して更地にして、いとこに無料で……、無料でもらってもらうと向こうは後で「こんな贈与税がいるようなもの、もらうんじゃなかった」なんて言われますから、話をして全部処理しよう思ったんです。私もだから広島の資料もプレハブの中に全部ぶち込んだままになってますから、適当な受け入れ体制ができましたら遠慮会釈なくお送りしますんで……。

[小宮山] ほんとに長い時間どうもありがとうございました。

稲賀敬二名誉教授　略歴

昭和3・3・20　旅順市に生まれる
昭和22・3・　広島高等学校文科甲類卒業
昭和25・3・28　東京大学文学部文学科卒業
昭和29・3・　東京大学大学院特別研究生退学
昭和31・4・1　立教大学一般教育部講師
昭和31・10・1　広島大学文学部講師
昭和36・4・1　広島大学文学部助教授
昭和43・6・28　厚生委員会委員（昭和45年6月27日まで）
昭和44・6・11　広報委員会委員（昭和46年3月31日まで）
昭和45・7・16　広島大学文学部教授
昭和48・5・16　統合移転・改革に関する基本計画委員会委員
昭和51・3・2　統合移転・改革に関する基本計画委副委員長
昭和52・10・21　統合移転・改革に関する基本計画委員会委員長
昭和55・2・1　広島大学大学教育研究センター長
（昭和59年1月31日まで）
昭和61・6・　広島大学消費生活協同組合常務理事
（昭和63年3月31日まで）
昭和62・10・1　広島大学評議員
昭和63・4・1　広島大学文学部長、大学院文学研究科長
平成2・3・31　広島大学辞職
平成2・4・1　放送大学客員教授
広島ビデオ学習センター準備室長
平成2・4・10　広島大学名誉教授
平成2・6・8　放送大学広島ビデオ学習センター長
（平成6年3月31日まで）
平成5・4・1　安田女子大学文学部教授
平成6・4・1　安田女子大学学長補佐
平成6・10・15　安田女子大学言語文化研究所長
平成13・3・31　安田女子大学退職
平成13・4・11　死去

稲賀敬二名誉教授は、平成一三（二〇〇一）年四月一一日逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。
なお、ご遺族により『藤の色濃き黄昏に　稲賀敬二遺文・回想集』（平成一五年七月）が刊行されております。この聞取調査に関係する文章も収録されておりますので、ご参照ください。
（広島大学文書館設立準備室）

基本計画委員会関連稲賀敬二作成メモ一覧

No.	表　　題	作成日	備　　考
1	専門委員会等、組織構成について　幹事会の諸意見	S48.10. 8	幹事会配付資料。
2	広島大学統合移転・改革についての中期将来計画（案）	S49. 4. 6	幹事会配付資料。
3	広島大学統合移転・改革についての中期将来計画	S49. 5. 1	幹事会配付資料。「はじめに」「研究・教育体制の改革」～第２章。
4	広島大学統合移転・改革についての中期将来計画	S49. 5. 1	幹事会配付資料。「各部局研究・教育体制の具体構想」「新キャンパスにおける図書館構想」
5	広島大学大学院組織図（案）	S49. 5.28	幹事会配付資料。
6	広島大学の統合移転に伴う改革整備計画について	S49. 8.27	小尾郊一宛稲賀書簡添付。
7	稲賀私案メモ	S49.10. 1	幹事会配付資料。10月16日会議で配布。
8	稲賀私案メモ	S49.10. 1	上記の詳細なもの。
9	幹事会11／15議題メモ	S49.11.15	幹事会配付資料。
10	移転年次計画等と関連して、お願い	S49.11.29	両会議配布資料。
11	「統合移転年次計画」立案のための諸条件	S49.12	『学内通信』（No.117）の原稿。作成日不明。
12	〔各領域間・領域内協力体制に関するメモ〕	S49.12	
13	稲賀メモ	S50. 2. 5	
14	文章化ノタメノ検討タタキ台	S50. 2. 7	幹事会配付資料。
15	「領域内・領域間連絡会議」の設定について－全学の協力体制を樹立するために－	S50. 2.28	幹事会配付資料。小尾氏ノート「基本計画委員会（2）」に挟み込み。
16	（広報□□前オキ案）研究教育体制専門委員会の素案「総合研究科」構想について	S50. 3	『学内通信』（No.120）の素案カ。作成日不明。
17	回答〔教職員組合からの質問状への回答〕	S50. 3.12	幹事会配付資料。
18	領域内（領域間）研究教育体制連絡会	S50. 3.28	幹事会配付資料。
19	〔５領域系協力の前提整理〕	S50. 6.20	幹事会配付資料。
20	各領域大学院研究科構想（案）	S50. 6.27	幹事会配付資料。
21	大学院５領域系編成案（検討のための試案）	S50. 7. 4	
22	統合移転実施本部〔仮称〕組織（案）	S50.11.28	幹事会配付資料。昭51. 1.16および昭51.10. 8 MP 委に再出。
23	大学院五領域研究科編成と総合研究科構想案－学内討議資料－（稲賀メモ）	S51. 6.11	委員会配付資料。
24	大学院五領域研究科編成と総合研究科構想案－学内討議資料－広島大学統合・移転に関する基本計画委員会	S51. 6.18	委員会配付資料。上記修正分。
25	〔部局・領域間の機能関連等〕	S51. 7.28	委員会配付資料。
26	部局意見の要約と今後の方向「大学院五領域研究科編成と総合研研究科構想(案)」について	S51. 9.10	委員会配付資料。『学内通信』(No.143)用原稿。９月13日の MP 委と学長との懇談の際にも資料として配付。
27	部局意見の要約と今後の方向「大学院五領域研究科編成と総合研研究科構想(案)」について	S51. 9.13	MP 委と学長との懇談の際に配布。
28	広島大学の統合移転について	S51.10. 8	委員会配付資料。昭和52年度学生募集要項トビラへの追加文案。
29	統合移転実施本部〔仮称〕組織(案)	S51.10. 8	委員会配付資料。１月６日の部局長連絡会議提出。
30	総合研究科博士課程後期(案)	S51.12.24	委員会配付資料。
31	独立研究科としての広島大学大学院「総合研究科」構想（案）	S52. 2	２月25日の委員会配布資料。
32	独立研究科としての広島大学大学院「総合研究科」構想（第一次答申）草案	S52. 2	３月９日の委員会配布資料。上記修正分。
33	専門委員会廃止及び委員交替問題について	S52. 4.22	委員会配付資料。
34	質問事項について（ノート）	S52.11. 4	第26回大学祭一般企画文団連主催「統合移転を考える」参加の際のノート。
35	〔総合研究科の基本方針(案)〕	S53. 2.10	委員会配付資料。
36	総合研究科（承前）	S53. 3.28	委員会配付資料。
37	総合研究科（博士課程後期・独立研究科）構想答申（案）要項	S53. 4.14	委員会配付資料。袋綴じにつきコピー不能。６月９日の委員会には修正分を配布。
38	総合研究科構想（案）	S53. 4.14	委員会配付資料。袋綴じにつきコピー不能。６月９日の委員会には修正分を配布。
39	学長答申用「広島大学大学院総合研究科について(答申)」	S53. 9	委員会配付資料。
40	総合研究科（博士課程後期・独立研究科）構想　答申要項	S53. 9	委員会配付資料。
41	総合研究科答申に関連するメモ（口頭説明委員長原稿）	S53. 9.19	委員会配付資料。
42	〔第67回基本計画委員会委員長報告〕	S54. 3.22	委員会配付資料。
43	委員会始末記－基本計画期から統合移転実施期へ－	S54. 5.15	委員会配付資料カ。『学内通信』（No.178）掲載記事の原稿。
44	総合科学研究科の内容説明について（稲賀個人意見）		